

Title	名付けの音象徴：コーパス分析と実験による通言語的研究
Sub Title	Sound symbolism in personal names : experimental and corpus-based explorations
Author	川原, 繁人(Kawahara, Shigeto)
Publisher	
Publication year	2021
Jtitle	科学研究費補助金研究成果報告書 (2020.)
JaLC DOI	
Abstract	<p>従来、音と意味の間には恣意的な関係しかないとされてきた。しかし、近年の言語学・心理学研究では音そのものに意味が備わっているという音象徴と呼ばれる現象が観察されることが分かってきた。本研究では、ポケモンの名前などの分析を通して、この音象徴現象をコーパスと実験を用いて検証した。対象とした言語は主に日本語であるが、共同研究を通して、英語やポルトガル語との比較対象も行った。これらの研究により、どのような音がどのような意味に結びつき、その結びつきには、どのような音声的な基盤があるのかを明らかにした。また、理論言語学の枠組みで音象徴を研究する新たな試みも行った。多くの論文が国際学術雑誌に掲載された。</p> <p>Most linguistic theories in the twentieth century have assumed that the relationships between sounds and meanings are in principle arbitrary. Recent research in linguistics and psychology has shown that we observe patterns of sound symbolism, systematic associations between sounds and meanings. In this research, I have used experimentation and corpus-based research to explore the nature of sound symbolic patterns in natural languages. The primary target language was Japanese, but through collaborative research, I have also conducted research on other languages, including English and Brazilian Portuguese. The overall research has revealed intriguing patterns of systematic sound-meaning associations, as well as what their phonetic bases might be. I have also attempted to model sound symbolic patterns using a framework that is developed in the theoretical linguistics literature. I have published many research articles in international academic journals and gave talks at various venues.</p>
Notes	研究種目：若手研究 (B) 研究期間：2017～2020 課題番号：17K13448 研究分野：言語学
Genre	Research Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KAKEN_17K13448seika

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 3 年 6 月 8 日現在

機関番号：32612

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2020

課題番号：17K13448

研究課題名（和文）名付けの音象徴：コーパス分析と実験による通言語的研究

研究課題名（英文）Sound symbolism in personal names: Experimental and corpus-based explorations

研究代表者

川原 繁人 (Kawahara, Shigeto)

慶應義塾大学・言語文化研究所（三田）・准教授

研究者番号：80718792

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,100,000円

研究成果の概要（和文）：従来、音と意味の間には恣意的な関係しかないとされてきた。しかし、近年の言語学・心理学研究では音そのものに意味が備わっているという音象徴と呼ばれる現象が観察されることが分かってきた。本研究では、ポケモンの名前などの分析を通して、この音象徴現象をコーパスと実験を用いて検証した。対象とした言語は主に日本語であるが、共同研究を通して、英語やポルトガル語との比較対象も行った。これらの研究により、どのような音がどのような意味に結びつき、その結びつきには、どのような音声的な基盤があるのかを明らかにした。また、理論言語学の枠組みで音象徴を研究する新たな試みも行った。多くの論文が国際学術雑誌に掲載された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

音と意味の間に体系的なつながりがあり、また、そのつながりが音声学的な基盤を持っていることを明らかにすることで、従来の言語観の一つの根幹を成す「音と意味の恣意性」に対して、大きな風穴を開けることができた。また、ポケモンなどの名付けを研究することで、この音象徴現象を実際のマーケティングの場で生かすための基礎研究となることが期待される。さらに、ポケモンやプリキュアといった言語学に触れたことのない人にも親しみやすい題材を分析することによって、言語学を専門としない人や学生に対しても、言語分析の意義を発信することができた。この研究を通して、アメリカやブラジルの大学と共同研究を行い、学術的国際交流を深めた。

研究成果の概要（英文）：Most linguistic theories in the twentieth century have assumed that the relationships between sounds and meanings are in principle arbitrary. Recent research in linguistics and psychology has shown that we observe patterns of sound symbolism, systematic associations between sounds and meanings. In this research, I have used experimentation and corpus-based research to explore the nature of sound symbolic patterns in natural languages. The primary target language was Japanese, but through collaborative research, I have also conducted research on other languages, including English and Brazilian Portuguese. The overall research has revealed intriguing patterns of systematic sound-meaning associations, as well as what their phonetic bases might be. I have also attempted to model sound symbolic patterns using a framework that is developed in the theoretical linguistics literature. I have published many research articles in international academic journals and gave talks at various venues.

研究分野：言語学

キーワード：言語学 音声学 音象徴 言語学教育 アウトリーチ活動

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

「音そのものに意味があるのか」という問題はプラトンやアリストテレスの時代から議論されているほど歴史のある問題である。もちろん、Saussure (1917)や Hockett (1959)が明確化したように、言語は音と意味を恣意的に結びつけることができるシステムであることは間違いない。しかし、一方で Sapir (1929)で報告されている実験的な検証を皮切りに「ある特定の音が、特定のイメージに結びつくことがある」という研究も盛んになってきた。例えば、[mal]と[mil]という単語を聞くと、多くの方が[mal]の方が大きいと判断する。この「[a]=大きい、[i]=小さい」というような結びつきを音象徴と呼ぶ。近年の言語学・心理学・認知科学の研究では、様々な言語で音象徴が存在することがわかってきており、どのような音がどのようなイメージを喚起するのか、その音声学的・音韻論的な基盤は何なのか、言語習得への関わりはあるのかなど、音象徴に関する様々な議論が活発になってきていた (Dingemanse et al. 2015)。Nielsen & Dingemanse (2020)によると、過去10年で、音象徴に関わる論文の出版数は急速的に増加している。

「音そのものに意味があるのか」という問いは、言語の基本構造に関する根本的な問題に関わる。また、音象徴が言語習得に関わっている可能性も高く (Imai & Kita 2004)、ひいては人間言語の起源や進化にも大事な役割を担ったという仮説すら提唱されている (Perman & Lupyan 2017)。また、音象徴は「共感覚知覚 (多感覚知覚)」という、人間の認知機能一般に見受けられる特徴の一形態としても考えられ (Spence 2001)、この意味で、音象徴の研究は、言語と一般認知機能の関係性にも光を当てることができる。これらの意味で音象徴を言語学の立場から分析することは非常に有意義なことであった。

2. 研究の目的

当初、本研究では申請者の過去の音象徴の研究を発展させ、固有名詞における名付けの音象徴パターンを様々な言語で分析することにより、言語の本質に光をあてていくことを目的とした。音象徴は、心理学や認知科学の観点からは注目を浴びていたが、理論言語学 (とくに生成文法の枠組み) ではあまり分析の対象とされていなかったという背景があった。しかし、申請者は音象徴の分析も、理論言語学の発展に貢献できるとの感触を持っていて、この感触を具体化・明確化することで、音象徴研究と理論言語学の橋渡しを行うことも大きな目標の一つであった。また言語学は、専門家以外にはとっつきにくいところもあり、言語学を専門としない一般の人や学生にも興味を持ってもらうきっかけを考える必要性も感じていた。この問題意識に対して、プリキュアやポケモンの名前などを研究対象とすることで、身近な題材を通して、言語学をより広い人たちに知ってもらうことも目標とした。

これらの一般的な問題意識を背景とし、本研究では「特定の製品の名前には、その製品のイメージに合った音を使用されやすい」という仮説のもと、固有名詞の音象徴を通言語的に研究した。また、申請者の専門とする音声学の立場から、人間が音声を発する際の調音的・音響的な特徴が音象徴の基盤になっているという仮説を検証した。分析の対象として、プリキュアやポケモンの名前など身近なものを選び、言語学を専門としない人にも、言語研究の重要性や楽しさを広く発信することも大きな目的の一つとした。

またポケモンの名前は様々な言語で作られているため音象徴の通言語学的分析が可能であり、国際共同研究を通じて、様々な言語間の比較対象を行った。また、音象徴という現象は、生成文法では、あまり分析の対象にされてこなかったが (Alderete & Kochetov 2017)、音象徴の性質を吟味すると、伝統的に音韻現象として分析されてきたものと同じ特徴をもっていることが判明してきた (専門的に言えば、stochasticity と cumulativity の2点)。よって、本研究では、生成音韻論で近年活発に議論されている最大エントロピー調和文法 (Maximum Entropy Harmonic Grammar) を用いて、音から意味への写像をモデリングすることを試みた。また、より広い観点から、音象徴の分析が理論音韻論の分析に貢献できることを明示し、音象徴の研究者と理論音韻論者の橋渡しを行うことを目的とした。

3. 研究の方法

研究の核の一つとなったのはポケモンの名前における音象徴の分析である。日本語の実際のポケモンの分析を皮切りに、無意味語を使った実験を日本語話者、英語話者、ポルトガル語話者な

どを対象に行った。これらの分析から、ポケモンにおける「進化レベル」や「タイプ」、さらには「なつき度」などまでも音象徴的に表されることが分かってきた。ポケモンで観察される音象徴パターンと、実在の言語で観察される音象徴パターンを比較することで「生存に必要な性質こそが音象徴によって表される」という一般的な仮説を提唱するに至った。実在語のポケモンの分析は、日本語だけでなく、英語・韓国語・中国語・ロシア語・フランス語・ドイツ語などを対象に行われた（前者4つは、申請者を含めた国際共同研究チームによるもの、後者2つは他の研究チームによるもの）。また、ランダムフォレストなど機械学習の方法を取り入れた分析も進行中である。ポケモンの分析だけでなく、おむつの名前やプリキュアの名前など、さまざまな分野の名前を分析した。すべての分野の分析において、実在語の分析と無意味語を使った実験の分析をバランス良く行った。

4. 研究成果

今回の研究によって、以下の音象徴的なつながりが明らかになった。

- 「濁音」= 力強さ、大きさ、重さ、悪役（英語・日本語・ポルトガル語・ロシア語）
- 「語の長さ」= 大きさ（英語・日本語・ポルトガル語、その他多くの言語）
- 「開口母音」= 大きさ（英語・日本語・ポルトガル語・ロシア語）
- 「閉口母音」= 小ささ（英語・日本語・ポルトガル語・ロシア語）
- 「両唇音」= かわいらしさ、おむつ（英語・日本語）
- 「舌先摩擦音」= 飛行（英語・日本語）

音象徴の具体的な分析を多くの国際学術雑誌に出版することができた。最も大事な成果としては、最大エントロピー調和文法を用いた音象徴分析を提唱した論文の一つは *Phonology* に出版され、また、その追試実験が *Language* に出版されることが決まっている。

ポケモンの実在語の分析は、*Phonetica* に掲載され、多くの研究者がこの論文を発展される形で他の言語へ対象を広げた。日本人を対象とした実験は、言語研究や *Journal of Japanese Linguistics* (2本)、英語話者を対象とした実験は、*Linguistics* と *Laboratory Phonology* に、ポルトガル語を対象にした実験は *Journal of Psycholinguistic Research* に掲載された。これらの分析は、ポケモンの進化レベルに関するものであったが、後の研究でポケモンタイプにも音象徴が関わっていることが明らかになり、それらの分析は音声研究、*Review of Cognitive Linguistics*、*Open Linguistics*、*Journal of Portuguese Linguistics* に掲載された。

ポケモンを利用して、音象徴の研究ではよく知られている「ブーバ・キキ効果」を検証した論文は音韻研究に掲載された。また、ブーバ・キキ効果や他の音象徴現象を25以上の言語で一斉に比較する国際共同プロジェクトにも参加し、その成果の一つは *Nature* 系列の *Scientific Reports* に掲載された。

音象徴と理論音韻論者の橋渡しを目指した概説論文は *Language and Linguistic Compass* から出版された。この論文の出版に伴い、学生が音象徴を通じて、さまざまな音声学的・言語学的な概念に親しむことができるような *Teaching Guide* も別個掲載された。音象徴を言語学教育に生かすことに関する論文は、*Southern Review*、*Proceedings of ISAPh* などにも掲載された。

総じて、多くの研究論文を国内・国外の学術雑誌に出版することができたと言えるであろう。その他、査読中の論文も数点あり、今後とも出版成果が期待される。また、これらの論文の多くが、学生や若手研究者との共著である点も明記しておきたい。

また、ポケモンを使った音象徴分析は世界的に認知され、2018年にはこれをテーマとした国際学会を慶應義塾大学にて開催した。また、海外の講演会に呼ばれることも多く、ドイツの *Leibniz-Centre General Linguistics (ZAS)* やフランスの *Centre national de la recherche scientifique (CNRS)*、アメリカの様々な大学 (*University of North Carolina, Chapel Hill* など) でも特別招待講演を行った。イギリスの *University of College London* での講演も予定されている。ポケモンの音象徴分析は、世界各国の研究者から認知され始めていると考えてよいであろう。これらの招待講演に加えて、個別の分析は、日本認知言語学会、日本音韻論学会や *Annual Meeting of Phonology* などの国内外の学会でも積極的に発表した。

さらにポケモンやプリキュアを題材とした言語分析は、言語学を知らない一般の人や学生たちの興味を引くのに有用であり、日本音声学会などで一般向けの講演会を行った。また、一般向けの解説記事が雑誌『ケトル』や『三田評論』に掲載され、同じように、細馬宏通氏との一般向け対談が『早稲田文学』に掲載された。音象徴を題材とした音声学入門の本『「あ」は「い」より大きい!?』もひつじ書房より出版され、2021年の時点で3刷に至っている。また、この入門本を土台として、より広い範囲の音声学の基礎を学べる『ビジュアル音声学』も三省堂から出版

された。後者も、2021年時点で3刷に至っている。さらに、YouTubeに音象徴の分析の解説動画を一般公開することにより、言語学・音声学を広く学べるような教材を用意した。

最後に、これらの研究により、多くの海外の研究機関との共同研究が始まったことも特筆すべき点である。イギリス・フランス・ブラジル・ドイツ・アメリカ・シンガポールなどの研究者たちと継続的に研究を行っている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計19件（うち査読付論文 14件 / うち国際共著 6件 / うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 Godoy, Mahayana C., Neemias Silva de Souza Filho, Juliana G. Marques de Souza, Halis Alves, Shigeto Kawahara	4. 巻 -
2. 論文標題 Gotta name'em all: an experimental study on the sound symbolism of Pokemon names in Brazilian Portuguese	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Journal of Psycholinguistic Research	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1007/s10936-019-09679-2	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する
1. 著者名 Kawahara, Shigeto	4. 巻 7
2. 論文標題 What's in a PreCure name?	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 ICU Working Papers in Linguistics	6. 最初と最後の頁 15 - 22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 Kawahara, Shigeto and Gakuji Kumagai	4. 巻 23
2. 論文標題 Inferring Pokemon types using sound symbolism: The effects of voicing and labiality	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Journal of Phonetic Society of Japan	6. 最初と最後の頁 111 - 116
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 Kawahara, Shigeto	4. 巻 -
2. 論文標題 Teaching phonetics through sound symbolism	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Proceedings of ISAPh.	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Shigeto Kawahara, Atsushi Noto, Gakuji Kumagai	4. 巻 75(3)
2. 論文標題 The sound symbolic patterns in Pokemon names.	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Phonetica	6. 最初と最後の頁 219 - 244
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1159/000484938	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 熊谷学而・川原繁人	4. 巻 155
2. 論文標題 ポケモン名付けにおける母音と有声阻害音効果: 実験と理論からアプローチ	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 言語研究	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Shigeto Kawahara, Miwa Isobe, Yukino Kobayashi, Tomoko Monou and Reiko Okabe	4. 巻 22(2)
2. 論文標題 Acquisition of sound symbolic values of vowels and voiced obstruents by Japanese children: Using a Pokemonastics paradigm.	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Journal of the Phonetic Society of Japan	6. 最初と最後の頁 122 - 130
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Shigeto Kawahara, Miwa Isobe, Yukino Kobayashi, Tomoko Okabe, Reiko Okabe, and Yasuyo Minagawa	4. 巻 50
2. 論文標題 Acquisition of the takete-maluma effect by Japanese speakers	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 REPORTS of the Keio Institute of Cultural and Linguistic Studies	6. 最初と最後の頁 63 - 78
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Kawahara Shigeto, Breiss Canaan	4. 巻 12
2. 論文標題 Exploring the nature of cumulativity in sound symbolism: Experimental studies of Pokemonastics with English speakers	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Laboratory Phonology: Journal of the Association for Laboratory Phonology	6. 最初と最後の頁 —
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.5334/labphon.280	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 Godoy Mahayana C., Gomes Andr? Lucas, Kumagai Gakuji, Kawahara Shigeto	4. 巻 20
2. 論文標題 Sound symbolism in Brazilian Portuguese Pokemon names: Evidence for cross-linguistic similarities and differences	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Journal of Portuguese Linguistics	6. 最初と最後の頁 1 - 1
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.5334/jpl.257	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 Kawahara Shigeto, Moore Jeff	4. 巻 59(3)
2. 論文標題 How to express evolution in English Pokemon names	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Linguistics	6. 最初と最後の頁 —
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1515/ling-2021-0057	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 Kawahara Shigeto, Kumagai Gakuji	4. 巻 37
2. 論文標題 What voiced obstruents symbolically represent in Japanese: evidence from the Pokemon universe	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Journal of Japanese Linguistics	6. 最初と最後の頁 3 - 24
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1515/jjl-2021-2031	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 Kawahara Shigeto	4. 巻 37
2. 論文標題 A wug-shaped curve in sound symbolism: the case of Japanese Pokemon names	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Phonology	6. 最初と最後の頁 383 - 418
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1017/S0952675720000202	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Kawahara Shigeto	4. 巻 14
2. 論文標題 Sound symbolism and theoretical phonology (teaching and learning guide)	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Language and Linguistics Compass	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1111/lnc3.12376	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Kawahara Shigeto	4. 巻 14
2. 論文標題 Teaching and learning guide for "Sound symbolism and theoretical phonology"	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Language and Linguistics Compass	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1111/lnc3.12372	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Kawahara Shigeto, Godoy Mahayana C., Kumagai Gakuji	4. 巻 6
2. 論文標題 Do Sibilants Fly? Evidence from a Sound Symbolic Pattern in Pokemon Names	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Open Linguistics	6. 最初と最後の頁 386 - 400
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1515/opli-2020-0027	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 Kawahara Shigeto, Kumagai Gakuji	4. 巻 35
2. 論文標題 Expressing evolution in Pokemon names: Experimental explorations	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Journal of Japanese Linguistics	6. 最初と最後の頁 3 - 38
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1515/jjl-2019-2002	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Kawahara, Shigeto	4. 巻 -
2. 論文標題 Testing MaxEnt with sound symbolism: A stripy wug-shaped curve in Japanese Pokemon names	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Language	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Kawahara, Shigeto	4. 巻 24
2. 論文標題 Pokemon meets psychology and linguistics: Experimental and theoretical exploration of the bouba-kiki effect	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Phonological Studies	6. 最初と最後の頁 77 - 84
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計23件 (うち招待講演 11件 / うち国際学会 5件)

1. 発表者名 川原繁人
2. 発表標題 音とことばのふしぎな世界 2019: プリキュア、ポケモンから日本語ラップまで
3. 学会等名 愛知大学招待講演 (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 川原繁人
2. 発表標題 私たちはどうしゃべっているのか?音声学への招待
3. 学会等名 数理の翼伊計島セミナー(招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Kumagai, Gakuji & Shigeto Kawahara
2. 発表標題 The sound symbolic value of Japanese lexical pitch accent: A case study of baby diaper names
3. 学会等名 International Conference on Phonetics and Phonology (ICPP) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 川原繁人
2. 発表標題 プリキユア名と両唇音の音象徴
3. 学会等名 日本音声学会第 33 回全国大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 熊谷学而・川原繁人
2. 発表標題 音節構造から生じる音象徴:赤ちゃん用オムツの名前の分析
3. 学会等名 日本音声学会第 33 回全国大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 小林 ゆきの、磯部 美和、桃生 朋子、岡部 玲子、川原 繁人
2. 発表標題 幼児はポケモン名付けに音象徴を用いるか-ポケモンのネーミングにおける母音と有声阻害音の効果-
3. 学会等名 日本言語学会第 156 回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 川原繁人
2. 発表標題 続「あ」は「い」より大きい!?
3. 学会等名 大東文化大学秋季英文学会 (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 川原繁人
2. 発表標題 名付けの不思議と音声の不思議
3. 学会等名 日本大学国際教養学科 第2回学術講演会 (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Yukino Kobayashi, Miwa Isobe, Shigeto Kawahara, Tomoko Monou, Reiko Okabe, Kazuhiro Abe, Yasuyo Minagawa
2. 発表標題 Acquisition of the takete-maluma effects by Japanese speaker: A cross-sectional study
3. 学会等名 MAPLL x TCP x TL x TaLK (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Shigeto Kawahara
2. 発表標題 Teaching phonetics through sound symbolism
3. 学会等名 The 2nd International Symposium on Applied Phonotics (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 川原繁人
2. 発表標題 音象徴からみる『音とことばのふしぎな世界』:ポケモン、ウルトラマン、メイドさん分析から言語学教育へ
3. 学会等名 沖縄外語文学会 (招待講演)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 熊谷学而・川原繁人
2. 発表標題 ポケモンのネーミングにおける母音と有声阻害音の効果
3. 学会等名 日本言語学会第 155 回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 熊谷学而・川原繁人
2. 発表標題 音象徴の抽象性:赤ちゃん用オムツのネーミングにおける唇音
3. 学会等名 日本音声学会第31 回全国大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Kawahara, Shigeto
2. 発表標題 Pokemonastics: what we are doing and why we are doing it.
3. 学会等名 University of College London (招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Kawahara, Shigeto
2. 発表標題 Pokemonastics: what we are doing and why we are doing it.
3. 学会等名 ZAS (招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Kawahara, Shigeto
2. 発表標題 Pokemonastics: what we are doing and why we are doing it.
3. 学会等名 CNRS (招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Kawahara, Shigeto
2. 発表標題 What can we learn about linguistic knowledge from Pokemon names
3. 学会等名 University of North Carolina, Carolina Asia Center (招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 川原 繁人
2. 発表標題 オンラインで(も)楽しく学ぶ音声学
3. 学会等名 日本音声学会公開セミナー
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Shigeto Kawahara
2. 発表標題 Interfacing sound symbolism with formal phonology
3. 学会等名 IERS workshop: Current trends in the interface between phonetics and phonology (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 川原 繁人
2. 発表標題 プリキュア名と両唇音の音象徴 II: 実験的検証
3. 学会等名 日本音声学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 川原 繁人
2. 発表標題 音象徴と言語学—教育と研究
3. 学会等名 日本認知言語学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Kawahara, Shigeto & Canaan Breiss
2. 発表標題 Exploring the nature of cumulativity through sound symbolism
3. 学会等名 Annual Meeting of Phonology (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Kawahara, Shigeto & Canaan Breiss
2. 発表標題 MaxEnt Harmonic Grammar and sound symbolism: Two case studies from English
3. 学会等名 Phonological Society of Japan
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 川原繁人	4. 発行年 2018年
2. 出版社 三省堂	5. 総ページ数 240
3. 書名 ビジュアル音声学	

1. 著者名 川原繁人	4. 発行年 2017年
2. 出版社 ひつじ書房	5. 総ページ数 210
3. 書名 「あ」は「い」より大きい!?: 音象徴で学ぶ音声学入門	

〔産業財産権〕

〔その他〕

ポケモン音象徴研究のまとめ
<http://user.keio.ac.jp/~kawahara/research.html>
 The 1st international conference on Pokemonastics
<https://1stpokemonastics.wordpress.com>
 The first conference on Pokemonastics
<https://1stpokemonastics.wordpress.com>

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会	開催年
The 1st international conference on Pokemonastics	2018年～2018年

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
ブラジル	Federal University of Rio Grande			
米国	University of Southern California	University of California, Berkeley	University of Chicago	
シンガポール	National University of Singapore			
韓国	Chonnam National University			
ドイツ	ZAS			
英国	University of Birmingham			
フランス	CNRS			